

「たいやきエッセイ」(梓組み指定作文)の魅力と可能性―高校国語科教師としての澤田英史

広島大学 田中宏幸

一、はじめに

澤田英史氏と親しくさせていただくようになったのは、一九八九(平成元)年四月、神戸大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程に兵庫県教育委員会からの現職派遣院生として入学してからである。澤田氏は、前年度に同じく現職派遣院生として入学し、浜本純逸先生のご指導を受けておられたが、浜本先生の計らいで私も二年次生対象の演習を一緒に受講させていただくことができ、それ以来、「両輪の会」の例会や兵庫県高等学校教育研究会国語部会の会合等において、畏友として語り合えるようになった。また、「同国語部会編『自己をひらく表現指導』(右文書院、一九九五年五月)の刊行の際には、編集委員として知恵をお借りし、同書のコラム「授業のアイデア」五編の執筆にも力を注いでいた。

さて、その澤田氏執筆によるコラム五篇は、いずれもユーモアとウィットに満ちた独創的なものである。約二〇年前の実践提案であるが、今なお新鮮味を失うことがない。それぞれわずか1〜2ページの紙面であるにもかかわらず、授業のねらいや指導手順や学習成果が明確に述べられている。焦点の絞り込みが見事だからであろう。本稿では、これらの実践提案(学習指導例)を取り上げながら、「梓組み作文」を中心に、澤田実践の魅力と可能性について考えてみたい。

二、澤田氏の「授業のアイデア」の独創性

コラム1「論の進め方を学ばせる―梓組み指定作文」(同書22〜23ページ)は、竹西寛子の随想「ことばと私」の骨組みを手本として、「見過ごしていた物事に新しい意味を見出した経験」について述べさせるとい

う指導（一九八六年、兵庫県立長田高校二年生を対象とした実践）である。本教材の骨組みを、①「呈示」―②「通年に対する疑念」―③「発見」―④「再認識」―⑤「自分の変化」であるととらえ、この論の展開を司っている具体的なフレーズ（接続語句や文末表現等）を使って、自分でも随想を書いてみるのである。指定するフレーズは、①「……という（種類の）ものがある」―②「あたりまえのように……」―③「……とはそういうものであろう」―④「となると……」―⑤「そう思うようになってから、……」である。学習者はこうしたフレーズを活用しながら書き進めていくことによって、単に「論の進め方の一つの形」を習得することにとどまらず、身の回りの出来事について「新たな発見・認識」ができるようになる。「形（型）」が指定されるということは一見窮屈な条件であるように思われるが、実際に書いてみると、筆の進みが早く、納得できる文章になりやすい。これまで「漠」とした状態であった思いや考えに「明確な輪郭」が与えられるからであろう。

この課題の場合、主題の絞り込みについては、完全に学習者に任せようである。後に取り上げる「たいやきエッセイ」（「私の流儀」の擬態

語化）に比べると、話題を見つけるのに戸惑ったのではないかと懸念されるが、この実践の成果である生徒作品例「食品添加物」「BGM」「自由な校風」などをモデルとして提示してやれば、他の高校でも取り組みやすいものとなろう。十数年後には、府川源一郎・高木まさき・長編の会編『認識力を育てる「書き換え」学習―中学校・高校編』（東洋館出版社、二〇〇四年）が刊行され、「書き換え」（リライト）が高校でも広く実践されていくようになるが、この実践は、その先駆けとして位置づけることができる。

コラム2「言葉への関心を高める―漢和休題」（同書33ページ）は、『大漢和辞典』の広告「漢和休題」によって漢字に関心を持たせ、生徒にも「自分の発見したユニークな漢字」を探させて発表させるという学習指導である。この新聞広告には、例えば、「読んで下さい。まるごと一つの漢字です」という見出しとともに『龍』を四つ集めた漢字（「言葉が多い」の意。ギネスブック認定「最も画数の多い漢字」と簡潔な解説とが示されている。また、「たぶらかされてはいけません。由緒正しい漢字です」という見出しとともに、『予』を上下反転させた漢字（「人を

たぶらかす」の意が示されている。このようなインパクトのある広告を、語彙指導の一環として直ちに教材化するセンスのよさにまず感心させられるが、授業での閑話として取り上げるにとどめるのではなく、その教材をモデルに、「自分の発見したユニークな漢字を探して発表する」という表現活動に繋いでいくところに澤田氏の獨創性がある。「他の人がまだ知らない漢字を見つけてみよう」（発見者になろう）という課題の設定が学習意欲を喚起し、「辞書を読み込む」という取材活動を活性化させ、最終的にはレポート集の作成に繋がっていく。こうした帯単元を授業の初めに組み込んでいくことによつて、平生から「言葉への関心」をいっそう高めていくのである。

コラム3 「表現への拒絶反応を和らげる―感想絵」（同書 67 ページ）は、宮沢賢治「なめとこ山の熊」の学習において「最も印象に残った場面を絵で表現する」という課題を与え、「目的を持った読みの大切さ」と「心理や時間に関する文章表現の効用」に気づかせるという学習指導である。小説を読むたびに感想文を書かされることに食傷気味の学習者には新しい刺激となり、作品の感想を焦点化することに繋がるという効果

が期待される。

もつとも、「絵で表現する」という課題については、賛否両論が出てくるであろう。とりわけ「絵は下手だからいやだ」という受けとめ方をする学習者に対してどのような配慮をしていくかが問題となる。これについて澤田氏は、「約束手形」の発行を許可するという方法をとる。つまり、「もつと技術や時間があれば、このように書くつもりだ」というコメントを受け付けることにしたのである。学習者の実態に応じて「簡単な絵コラ（撮影用台本）」とその解説を書く」というように柔軟に課題を修正することで、どの学習者も楽しんで学習に取り組むことができる。「約束手形」というユーモラスなネーミングとともに、このように柔軟な展開を行ったところにも、澤田氏の授業デザインの獨創性を見てとることができる。

コラム4 「具体例を豊かにする―アンソロジー作り」（同書 167 ページ）は、中岡哲郎の評論「科学文明の曲がり角」に関連する「新聞・雑誌の記事」を探させたり、森本哲郎の評論「自然の声と文明」を発展させて「自然に関する言葉」の具体例を集めさせたりすることを通して、意見

文等を書く際の「題材面での蓄え」を豊かにしていこうとする学習指導である。前者の実践では、評価の観点を「速さ」と「内容」に定め、すばやく対応したものを奨励するとともに、提出物をプリントして授業で紹介しながら「要約のコツ」や「視点の鋭さ」などにも触れていく。こうした指導を重ねることによって、「資料を見つける目」が養われ、「要約の力」も高まり、「自己の関心を社会的に広げていく」ことになる。後者の実践でも、学習者たちは「日本人の音への感性―雨音編」「同一風音編」「小倉百人一首に見る『月のとらえ方』」として、自然に関する言葉を数多く集めていった。コラム3の実践同様に、言語活動に楽しんで取り組みながら、おのずから言葉が獲得されていくという効果が期待される。テンポの良さと学習の持続性、この二点が組み合わされているところにも澤田氏の獨創性を認めることができよう。

コラム5「成就感を持たせる―たった一冊の自分の本」(同書183ページ)は、生徒作品をまとめる際の「製本の仕方」を紹介したものである。「粘葉装」(でつちようそう)と呼ばれる日本古来の製本法(印刷面を内側にして谷折りにし、背面同士を糊で貼付けて冊子にする方法。弘法大

師が考案したと伝えられている)が、澤田氏の手書きイラストを添えて、わかりやすく解説されている。現代では手づくりの絵本などにも応用されている方法だが、この製本法を取り入れることによって、ファイルなどに収めた「仮綴じ」ではなく、まさしく「世界にたった一冊の自分の本」を創りあげたという成就感が得られるのである。

「自分の本」を創りあげるといふ実践については、柳瀬真子の「楽しい修学旅行記の指導」(『楽しい作文教室』第一法規、一九八〇年)や、大村はまの「個人文集」(『大村はま国語教室』第六巻、筑摩書房、一九八六年)などが有名であるが、いずれも中学校の事例である。澤田氏は、教科内容の理解に重点が置かれがちな高等学校においても、自己の表現を確かかつ手軽に記録できる具体的方法を提示することによって、「書くこと」においていつそうの達成感が得られるようになり、さらにそれが学習意欲の持続や「自己学習力」の形成として生かされていくことを願ったのであろう。

このように、澤田氏の提示した「授業のアイデア」は、範文の「型」を活用したり、「言葉とは別の表現媒体」(絵など)を用いたりして、学

習者の発想を引き出し、認識力や思考力を育てていくものであった。また、評論教材の理解を契機としてその具体例を探させるなど、取材力や語彙力を高めていくものであった。さらに、こうした活動を記録する方法にまで目を配り、生涯にわたって自ら学び続けていく「学習主体」の育成を強く願うものであった。澤田氏の独創性は、学習者に対するこうした温かい眼差しと、言葉文化に対する鋭い感性から生まれてきたものであると言えるだろう。

三、「たいやきエッセイ」の魅力

「たいやきエッセイ」とは、「枠組み指定作文」の作り方が、小麦粉などから作った生地を鯛の形の鑄型に流し込み、餡を入れて焼く和菓子「たいやき」に似ているところから名づけられたものである。澤田氏のユーモアの精神が発揮された印象的なネーミングである。このユーモラスな名称は、『両輪』第一七号（一九九五年一〇月）掲載の論考で初めて用いられ、その後、『両輪』同人が愛用する指導用語の一つとなった。だが、『月刊国語教育』通巻一七四号（東京法令出版、一九九五年十二月）の

論考では「枠組み指定作文」に改められ、さらに『高等学校国語科・新しい授業の工夫20選（第4集）表現指導編』（大修館書店、一九九八年四月）に掲載された論考では「枠組み作文」という名称に変更された。仲間内での愛称では、毎回、名前の由来を説明せざるを得なくなる。その煩雑さを回避するとともに、「指定」という語がもたらす制約感を緩和しようとしたのであろう。

さて、この三つの論考に共通して報告されている実践事例『雑木林の道』の授業」は、「枠組み指定作文」の中でも出色のものだと思われる。「論の展開の仕方」を習得させるだけでなく、学習者たちに、「自分の流儀」というテーマで「自分の生き方やあり方」について深く考えさせ、その流儀を多面的に捉え直しながら「新しい発想や思考・認識」を導き出すものとなっているからである。

この実践で用いられた教材は、森毅の随想「雑木林の小道―ふらふら―」（『国語I』教育出版、一九九五年／出典『ひとり』で渡ればあぶなくない』ちくま文庫、一九八九年）である。

この随想で、筆者は、「二年の計画を立てるとするのが苦手だ」と自分

の不得手なことから語り出して読者に親近感と関心を持たせた上で、自分の対策を紹介する。さらに、それを「ふらふら」という「擬態語」でキーワード化して「自分の流儀」として主張していくが、いったんその弱点について触れておいてから、鮮やかに切り返すという論法を用いている。いわゆる「反論先取り型」の文章展開である。世間一般の考え方は異なることを主張するのだから、予想される悪い評価にあらかじめ言及しておいて、再び自分の土俵で論じていく必要がある。その構成も見事だが、それ以上にこの文章の魅力は、まさにこの「再反論」の豊かさにあると言えよう。「ふらふらする」には「いつでも方向感覚を失わぬように」することが必要であるとか、「誤りを知り、それを直す」ことの方が「高級な能力を要する」とか、「じつと立っているには、平衡感覚が必要である」とか、「白紙の未来に立ち向かう実存的存在」などと、「ふらふら」という流儀にどれほどの計り知れない意義があるかを軽妙な語り口で主張していくのである。通常は低い評価しか得られない「ふらふら」に新しい価値を見出し、読者を驚嘆させていく点に、この教材の特質と魅力があると言えよう。

さて、この教材で用いられている「枠組み」は次のようなものである。

- ① ……というのが苦手だ。〔書き出し〕
- ② それで、なに()にせよ、……ようにしている。〔自分の流儀(主張)〕
- ③ それで……というのが、僕の流儀である。これは……ようにみられやすい。〔流儀の確認(擬態語化)と、想定される悪い評価〕
- ④ しかし、ちよつと言わせてもらえば、……〔弁護・反論〕
- ⑤ もつとも、……〔保留条件〕
- ⑥ それでも、……〔再主張〕

澤田氏は、この「枠組み表現」の①から④を用いて⑤・⑥は用いても用いなくてもよいとして、「私の流儀」を四〇〇字以内で書くように求めた。時間は二〇分。また、題名はできるだけ擬態語とするように促した。

その結果、ほとんどの生徒が規定時間内に、この「枠組み」に沿って自分なりの文章を書き上げたという。時間制限が厳しいために、修正す

べき点も残っているとはいうものの、「さらさら」の「つたり」「さっぱり」など、個性の発揮された楽しい作品がたくさん生まれていった。

そこで私も、澤田氏の教材分析と「枠組み指定」を参考にしながら、大学生たちに「私の流儀」というテーマで書かせたことがある。かつて勤務していた私立大学でも、現在勤務している国立大学でも、ほぼ毎年のように、この「枠組み指定作文」を「書くこと」の優れた実践事例として紹介するとともに、実際に書かせてみるのだが、どの年度においてもその評判はすこぶるよい。文章を書くことに苦手意識を持っている学習者であっても、漠然とした状態にあった自分の思いや考えを言葉にすることができ、しかも、自分のこれまでの生き方を見つめ直すことにながったというのである。「将来、国語科教員になることができれば、是非とも取り入れてみたい」と抱負を語る者も多い。「流儀を擬態語化する」という仕掛けが、「想」の焦点化を促すのであろう。「論の展開に悩まなくてよい」というのも、高い評価が得られる要因だ。相互評価する場合も、お互いの発想の面白さを学び合ったり、事例の豊かさに感心し合ったりして、コメントが書きやすく、達成感が得られるようである。もっ

とも、字数については、せめて六〇〇字程度は認めてやらねば、肝心の④の反論が内容の乏しいものになりかねない。学習者の実態によって、様々なアレンジをしていくことが必要だというものの、この「枠組み作文」の表現指導における価値は非常に大きいと言えるであろう。

澤田氏は、「たいやきエッセイ―枠組み指定作文の試み―」を、次の言葉で締めくくっている。

枠組み指定作文というのは単に文章の枠組みをまね、論の進め方の一つの形を学ぶことに終わるものではない。論理の形式を知ることによって、自分の身の回りにあつて漠として形を持たなかったものに明確な輪郭を与え、学習者をして自ずから発見・認識に導く体験をひらくものであると考える。自ら学ぶ力につながる、発想や思考・認識の方法を身につけさせるために、このような学習に適した骨格のはっきりした文章の発掘に努めるとともに、さらに工夫を重ねていきたい。

『両輪』第一七号、85ページ）
「枠組み作文」の意義と今後の研究課題を端的に指摘した見事なまとめである。

四、終わりに

澤田氏がこれらの実践に取り組んでおられたころ、私もほぼ同じ発想で「枠組み作文」に取り組んでいた。例えば、①寺田寅彦の随想「柿の種」〔『現代文』明治書院、一九八四年度版〕に見られるレトリックを利用して、「存外〇〇なもの」を発見してエッセイにまとめる実践〔『国語教育研究』第三四号、広島大学教育学部光葉会、一九九一年／改稿して『発見を導く表現指導』右文書院、一九九八年に収録をはじめとして、②伊丹十三「目玉焼きの正しい食べ方」(伊丹十三『女たちよ!』文春文庫、一九七五年／森岡健二編『文章構成法』東海大学出版会、一九八九年)を用いて「〇〇の正しい……方」について論じるエッセイを書く実践〔『教育学研究紀要』第四一巻第二部、中国四国教育学会、一九九六年／改稿して『発見を導く表現指導』右文書院、一九九八年に収録)や、③別役実「正しい風邪の引き方」〔『国語I』角川書店、一九九四年度版〕を用いて「正しい……の仕方」というマニュアル風エッセイを書く実践〔『教育学研究紀要』第四七巻第二部、中国四国教育学会、二〇〇二年)、④石田衣良「迷う力のすばらしさ」〔『新編現代文B』大修館書店、二〇

一四年度版)を用いて「〇〇する力のすばらしさ」というテーマでエッセイを書く実践〔『月刊国語教育研究』五一一号、日本国語教育学会、二〇一四年一月)など、「枠組み作文」の開発に努めてきた。②③は大学生を対象とした指導事例であるが、高校生にも応用可能な方法であるという確信を得ることができた。④は、広島大学教育学部の卒業生が愛媛県の高等学校着任早々に取り組んでみた方法を、日本国語教育学会全国大会の分科会(ワークショップ)で、中・高等学校の教員に紹介したものである。いずれの場合も、新しい発想を引き出す方法として歓迎され、「枠組み作文」を活用しながら文章表現指導に取り組む教員が増えていった。

澤田氏が切り開いてくれた「枠組み作文」は、これからもさらに広がっていくに違いない。澤田氏が修士論文の研究テーマとした「自己学習力の形成」は、二一世紀を生きる子どもたちに必要な能力である。澤田氏の遺志を継ぎながら、新たな教材の開発と分析、主体的な学びを促す授業仮説の構築と実践による検証を重ねていきたい。